

## 神奈川のコレラ

大滝 紀雄

神奈川県を中心である横浜市は、開港後開かれた歴史の浅い都市である。しかもここは関東大震災と、第二次世界大戦の戦禍を蒙ったため、大切な資料の大部分を散逸してしまった。公文書館も無いし、県市の公共施設、公立図書館や資料室にも過去の資料は極めて少ない。昭和五十六年六月二日横浜開港記念日に旧英国領事館を改造、開館した「横浜開港資料館」は着々整備が整ってきた唯一の資料館といえる。

時おり旧家などから発見される古文書、日記類は数は少ないが貴重な記録である。

### 文政五年のコレラ

日本に初めてコレラが侵入したのは一八二二（文政五）年の夏であった。中国、朝鮮から侵入、対馬、下関<sup>(c)</sup>を通じて萩、広島から関西方面に流行した。更に東海道を東に向かったが、箱根の手前でくい止められ、神奈川、江戸には侵入しなかった。

### 安政五年のコレラ

前回の流行より三十六年後の一八五八（安政五）年、我が国は第二回目のコレラ流行に見舞われた。上海に寄港したのち

長崎へ入港した米艦ミシッピー号がコレラ患者を乗船させたためであった。長崎ではボンペが活躍中で、コレラ対策に  
応じた。ボンペに対応して大阪の適塾では、緒方洪庵が『虎狼痢治療』一〇〇部を印刷して配布した。初発から二カ月後  
には江戸に侵入した。

神奈川県では旧暦八月上旬から九月中旬にかけてコレラの大流行を見た。藤沢市文書館提供の古文書によると、安政五  
年八月十八日、片瀬村名主庄太郎の名で、「悪病流行付達」でコレラ流行の第一報ほかの記事が出ている。一八四九(嘉永  
二)年から一八六〇(安政七)年まで神奈川県に住んだ医師佐藤汝栖の『金川日記』の安政五年八月朔日の記事には次のよ  
うに記されている。

「此節当駅浜宿にて五七日之内 二十余人死ス其病先両足倦怠暫而痛甚忽吐瀉十余行未止腹痛衝心而死ス始医之誤治と  
思ひしに皆同病にて死ス」。同月十日の記事は、「小田原大多死 原 吉原 蒲原 三宿継立不相成程多死ス」

安政五年のコレラ流行は神奈川県でも猖獗を極めたが、江戸での発生状況はどうであつたらうか。情報源の相違により  
種々の数値が示されているが、信頼性は少ない。酒井、山本によれば、コレラ患者発生数は約六万、死者数は約三万人と  
推定される。『武江年表』によれば、同年八、九月の死者二万八千余人と記されている。

森鷗外の歴史小説『渋江抽斎』その五二、五三を読むと、抽斎が死んだのは、安政五年八月二十九日早朝、コレラ流行  
の最中で、年は五十四歳、症状は胃腸障害、発病後数日のあつけない死であつた。コレラとしても当然である。

翌一八五九年から一八六三(文久三)年までコレラの発生が見られ、多くの人が死亡した。しかしその後一八七七(明治  
十)年までの約十五年間は、コレラの発生はほとんど見られなかつたようである。厚生省医務局編集の『医制百年史』に  
も明治九年以前の伝染病発生者数は記載されていない。エルトリッジの横浜の西欧居留民の疾病に関する記録(一八六八  
一八七六)を見ても他の伝染病の記載はあるが、コレラの記事は見当たらない。

明治十年以降の国内コレラ患者数と死者数を、厚生省の統計によつて記す。括弧内は横浜市の患者数と死者数である。

年次	患者数	死者数
一八七七 明治十	一三、八一六 (一、一二八)	八、〇二七 (一、六三五)
一八七九 " 十二	一六二、八三七 (一、八一二)	一〇五、七八六 (一、六三八)
一八八一 " 十四	九、三八九	六、二三七
一八八二 " 十五	五一、六三一 (一、三一九)	三三、七八四 (一、〇二〇)
一八八五 " 十八	一三、八二四	九、三二九
一八八六 " 十九	一五五、九二二 (三、一〇七)	一〇八、四〇五 (二、二一〇)
一八九〇 " 二十三	四六、〇一九 (一、六八六)	三五、二二七 (一、五五九)
一八九一 " 二十四	一一、一四二 (一、九〇)	七、七六〇 (一、六五)
一八九五 " 二十八	五五、一四四	四〇、一五四
一九〇二 " 三十五	一一、八九一	八、〇一二
一九一六 大正五	一〇、三七一	七、四八二
一九四六 昭和二十一	一、二四五	五六〇

明治十年のコレラ

明治十年のコレラは九月に始まった。山本によれば、<sup>(二〇)</sup>流行経路としては横浜系統、長崎系統(初発患者は九月六日)および軍隊系統(初発は九月中旬)の三系統に大別される。最後の軍隊系統というのはたまたまこの年九月に西南戦争が終わり、征討軍が中央へ凱旋するに伴って、コレラ伝播が著しく促進される結果となったからである。横浜の初発患者は九月五日居留地三番館米国製茶会社(ウォルシュ・ホール)の従業員二名であった。病源はアモイから輸入した物品がコレラに伝染していたためと推測される。横浜毎日新聞によれば、<sup>(二一)</sup>上記の初発患者は間もなく死亡、さらに同業者一三人が発病、原因は同館の便所のそばの汚染された水を飲んだためと見られ、ただちに水の使用を禁じたと報じられている。その後の患者

発生状況も毎日新聞(二)に報じられている。横浜では九月十二、三日頃からちらちらと虎狼痢(コレラ)病のきざしが現れ、戸部町、伊勢町、伊勢山、桜木町に流行し、十五日には桜木町の女性が午前十時ころ発病し、午後八時に死亡した。伊勢町では二十歳と八歳と三歳の女性が伝染し、姉二人は即時死亡、末娘は十全医院に入院した。その後横浜市内のコレラ患者数は増加の一途をたどり、十一月十一日までに一、一二八名に達した。

ここで注意すべきことは、明治十年八月二十七日、内務省達乙第七九号で「虎列刺(コレラ)予防法心得」(三)が発せられていることである。これには檢疫、避病院、隔離、発生の届け出、死者埋葬のことなど二四項目にわたって詳細に記されている。内務省達の出た八月二十七日はこの年のコレラ初発患者の出るほんの数日前であったことが注目される。日本では十五年近くもコレラの発生を見なかったが、南アジア、中国などの状況からみて、日本侵入間違いないと見た内務省はかなり突っ込んだ通達を出したのである。この「心得」がある程度役だったことは否めない。というのは九月と十月の横浜毎日新聞はコレラ記事のない日が殆どないくらいである。「心得」は九月四日、五日、六日、七日、八日と連載され、付録の消毒其方法と吐瀉物洗浄法が続く。既述の通り、実際の流行を見たのが九月五日なので、これらの記事の掲載は誠に時宜を得たものであった。

しかしこの時期には未だ避病院(伝染病院)は実在しなかったため、野毛の十全医院が、コレラ患者を一手に引き受ける形となった。そして米医D・B・シモンズの活躍がひときり目立っていた。彼は開業医たちをも集めて予防と治療を指導し、消毒には石炭酸を用いた。石炭酸の需要は急上昇、価格も半月ほどの間に約三倍になったことが、毎日新聞九月二十一日の記事「石炭酸はこれまで七七、八銭なりしが流行病以来三円五十銭に騰貴せり」の記事から伺える。なお同日の記事に流行時は当分の間、芝居見物、寄席、辻講談禁止の通達が神奈川県権令野村靖の名で出ている。さらに通達は続く

○虎列刺予防ノ為メ該病患者或ハ死亡者アル家ハ左ノ雛形ノ通掲示致シ……………此旨相達候事

○第一号 患者ノ家ニ掲グル素文

此家にころり病者あり無用のものみだりに出入すべからず

明治十年 月 日  
神奈川県

○第二号 死亡者ノ家ニ掲グル素文

此家にころり病死人あり今幾日より十五日間無用のもの出入りすべからず

明治十年 月 日

しかしこれらの「病名票」や「死亡者票」を拒否するものが多く、かえって逆効果があったため数年で貼付施行は停止された。

シモンズとコレラの関係については、荒井の文献(二四)に詳しい。

横浜の伝染病院の始まりと検疫所の始まり

明治十年コレラ流行時、横浜に避病院はなかったが、この流行が避病院開設の原動力となったのも事実である。横浜毎日新聞、『横浜疫病史』(一五)を参考とする。初発患者から約二週間後の九月十九日太田避病院が開院した。敷地は数百坪、場所は太田村字西中、現在の三春台付近とすれば、野毛山の十全医院より徒歩二十分位の地点である。東京の駒込病院の開院が同年十月三日というから、横浜の伝染病院は日本最初のものといえるだろう。この病院は本格的なものではなかったが、十全医院に入りきれないかなりの患者が入院したらしい。二カ月ほどでコレラも下火になったので、十一月には閉院したが、建物はそのままの状態で残し、一旦有事の際には、使用可能としておいた。

明治十二年は表のようにコレラの大流行を見た。初発は愛媛県であったらしいが、夏には横浜でも多発した。同年八月四日横浜区和泉町（現在の南区浦舟町、横浜市大病院のあった付近）に避病院が建てられた。これは新築したというよりも、太田避病院が移転したと考えられる。太田避病院の患者が移され、太田避病院はこれを機会に廃止した。新病院の院長は宮

島義信で、英医ウィラーや米医シモンズも交替で出張したようである。この和泉町避病院は前回の病院と較べるとはるかに整備されたものであったらしい。

明治十年、内務省はコレラ予防法心得を出したが、伝染病予防規則を速やかに制定するの必要を感じ、これを起草して太政官に上申したが、まだ発令を見ないうちに明治十二年コレラの大流行を見たので、コレラに関する部分だけを抜粋して明治十二年六月二十八日コレラ予防法規則を交付した。これが我が国最初の伝染病予防法であった。

検疫所の歴史としては、明治十二年七月コレラの蔓延を防止するため、神奈川県に地方防疫局が設置され、同年九月その現業機関として「長浦消毒所」が神奈川県三浦郡長浦（横須賀市長浦）に設けられた。これが横浜防疫所の前身である。明治二十八年には現在の横浜市金沢区長浜に移転、「長浜検疫所」となった。大正十三年税関官制の改正により、港灣部の事務はすべて税関に移管され、検疫業務も横浜税関海務部が行うことになった。現在では横浜第二港灣合同庁舎の横浜検疫所で業務を行っている。<sup>(二六)</sup>

なお船舶の検疫体制として、明治十二年七月一日と七月八日の対策記事があるので記載しておく。<sup>(二七)</sup>

七月一日…国内検疫が強化され、コレラ流行地から東京港に入港する船舶に対しては、もれなく船中を調査し、感染者があるか、すでに患者があつて死去し現に葬儀を行ったか、あるいは患者を上陸させたかなどを明らかにし、一旦感染者のあつた船舶はただちに神奈川県下横須賀町長浦に設置した消毒所に回漕させ、消毒法の実施を命じた後証明書を交付し、もし現在患者があれば避病院に送付して「コレラ予防規則」の手続きをとることになった。

七月八日…内務省は神奈川県に対して、コレラ流行地を經てきた船舶は、県下長浦において十日間停泊させ、検疫委員が検査して航海中患者のなかつた船舶については、有病の港を発した日より算えて七日経過した後初めて入港を許すことにした。

ところでコレラ関係だけの法令でも枚挙に遑のないほどだが、重要なもののいくつかを『医制百年史・資料編』より抜

粹する。

虎列刺子防法心得

明 10・8・27

避病院仮規則

明 10・10・6

虎列刺病子防仮規則

明 12・6・27

海港虎列刺病伝染子防規則

明 12・7・24

檢疫停船規則

明 12・7・21

伝染病子防規則

明 13・7・9

伝染病子防法心得書(抄)

明 13・9・10

虎列刺病流行地方ヨリ来ル船舶検査規則

明 15・6・23

伝染病子防法上必要諸費ニ関スル件

明 27・2・8

伝染病子防法

明 30・4・1

海港檢疫法

明 32・6・2

コレラが流行する度に、錦絵やちらしが発行された。これらも見逃してしまえばそれまでだが、民間人にたいする啓蒙、流行病指導の指針と見れば、当時の医療水準を知る好資料ともなる。明治十二年八月、銀座精錡水本舗の岸田吟香が文章を書き、安達吟光が描いた「コレラ病子防の心得」という錦絵(二八)を見ると、夫婦が縁台で安全な食物を食べ、下男が庭で打ち水をして消毒をしている様子が見られる。文章の大意は次の通りである。

コレラは一人の患者から幾万人にも拡がるので、予防と養生が大切。水から伝染するというから、患家付近の水は絶対飲んではいけない。野菜も魚もよく煮て食べる。油で揚げたものは消化に良くない。良い酒は少しずつ飲めばかえってよるしい。家の掃除、下水の掃除、便所の掃除はコレラの流行時には特に良く行うこと。その後へ防臭剤を撒くこと。

衣服をたびたび洗濯して毎日入浴すること。その他は政府の指示に従うべきである。

全国で一六万人以上の患者を出した明治十二年のコレラは八月が極期で、その後減少、十二月には激減した。明治十三年、十四年も散発的な流行を見たが、明治十五年には、横浜を初め全国でかなり発生した。山本(一九)によれば、この年四月横浜に突然侵入経路不明の初発患者が出、神奈川県下で発生が続き、やがて全国に波及した。この年は八、九月が流行のピークであったという。『関口日記』の医療部分については私が『医療史探訪』(二〇)に解説しておいたが、明治十五年のコレラと思われる記事を『関口日記』(二一)によって取り上げてみよう。

五月廿二日 辛酉薄晴

今夜本宮町より疫病送出し致し候

七月廿八日 戊辰晴天

午前より役場へ集会コレラ病ノ儀ナリ

八月十五日 丙戌晴天

悪疫流行ニ付町内神明宮へ湯花ヲ上ル

九月廿六日 戊辰薄晴

木村祭典之儀本年ハコレラ病各地ニ流行致シ夫故是迄延引ニ相成候居候処本日鎮守ニ湯花ヲ上ル

これを読むと、五月から九月までコレラが流行、人々は神社に湯花を奉納して病を清めてもらったことが知れる。

### 明治十九年以降のコレラ流行

明治十六、十七、十八年にも患者は発生しているが、明治十九年の流行は物凄く、横浜の発生数は表の通り史上最高で、三、〇〇〇人を越えた。明治十九年のコレラ記事を『関口日記』(二二)より抜粋する。



七月八日 己巳

昨夜鶴見村松原藤吉コレラ病ニテ死亡

七月廿一日 壬午折々雨

コレラ病流行北南ニ而病人有之候ニ付町内江滝坂不動尊御神体巡回有之候

七月廿七日 戊子晴天

昨日今出屋九歳娘病死有之候処当節昭知事コレラ病流行ニ付……

出見世おのぶ事コレラ病ニ而新規仮病院へ参り居処昨夜死去いたし候由

七月廿八日 己丑晴天

北勤次郎事先頃より不快ノ処コレラ病ノ由ニ而仮病院へ参居候処コレラ病ノ義ハ消□由ニ付退院候由ニ候得共前前ノ

病氣重態之由

九月十五日 戊寅

昨夕又々南浜山崎喜三郎娘コレラ病ニ罹リ同夜死去夫より隣家山崎銀蔵方妹モ同断ニ付本日病院へ入ル

さらに明治十九年の流行を『毎日新聞』で見るとする。新聞の呼称が年代によって違うので念のため記しておく。

横浜毎日新聞

明治四年〜明治十二年十一月

東京横浜毎日新聞

明治十二年十二月〜明治十九年四月

毎日新聞

明治十九年五月〜明治三十九年六月

東京毎日新聞

明治三十九年七月以降

明治十九年には六月にコレラ患者が発生、花咲町、吉田町など現在の西区、中区に相当する横浜の中心地から発生している。

一昨日花咲町瓦斯局際の長屋にコレラ患者十二人あり内四名はただちに死亡し、他は避病院に入れり（『毎日』七月二日）  
検疫所 昨日官報号外を以て左の告示ありたり

告示第四号

横浜港ニ於テ虎列刺病発生ニ付キ東京横浜間陸路左ノ個所へ検疫所ヲ設ケ行旅人ヲ検査セシム

新橋停車場、品川停車場、大森停車場、羽根田村、荏原郡大井村、羽根田停車場

明治十九年七月三日

警視庁総監三嶋通庸（『毎日』七月四日）

『毎日』七月八日付けには、

○コレラ流行のため横浜港各小学校は七月六日より当分の間休校

○警部長、警察署長および衛生課長は昼夜詰め切り

『毎日』七月九日付けには、

○共同診療所を区内四カ所に設けて、医師二名宛詰め切り、何病の患者でも診察、往診も行うこと。費用は義捐金による。

『毎日』七月十六日付けには、

○有志の義捐金が約五、〇〇〇円に達した。

八月一日付けにはコレラ騒動が出ているが、これについては後述する。

コレラ患者発生数は、七月六日付けの『毎日』には、花咲町、桜木町、蓬萊町、住吉町、福富町、羽衣町、野毛町、永楽町、長者町、真砂町、元浜町などに総計一八名の新患が発生、死亡者一五名と記されている。八月五日付け、すなわち八月三日の患者数は横浜区（市）内八二名、郡部（神奈川県下）四〇名、合計一二二名、死者、区二六名、郡部一六名、合計四二名で、一日の死者としては最高であったのではないかと思われる。八月十八日付けでは、区内三八名、郡部二五名

合計六三名、死者区内二六名、郡部一六名、合計四二名と減少している。

十月二十八日内務省はコレラ流行地の解除を告示して、流行は終了した。ちなみに流行地の指定を受けたのが八月七日内務省告示によるので、約三カ月の流行期間であった。明治十九年の神奈川県全域のコレラ患者数は五、八九九名、死者は四、一七九名に達した。

明治二十年以後もコレラの発生が見られ、明治二十三年はかなりの患者数であったが、次第に鎮静化の方向に向かった。

### 横浜久保山墓地のコレラ供養碑

横浜市西区にある久保山共葬墓地の三カ所に官修墓地があり、戊申戦争と西南戦争の戦死者の一部が葬られていることはすでに『医療史探訪』<sup>(二三)</sup>に書いておいた。しかし、この同じ墓地の三カ所にコレラを含めた伝染病死者の墓碑と供養碑があることを最近知ったので会報とニュース<sup>(二四)</sup>に投稿しておいた。<sup>(二五)</sup>

久保山墓地は一八七四（明治七）年に開設され、現在横浜市衛生局の管理下にある。

第一の碑は十区にあり、高さ一八〇センチほどの三角形の自然石に「悪疫横死諸群霊墓」と中央に八文字が刻まれている。向かって右側には四行の漢文が見られ、左側には刻字者名がある。

記日明治十九年流行病之際無葬者

残骨參百余哀不忍見有志者謀久保

山埋葬明治廿六年春彼岸為有無縁

於大光院宮施餓鬼大法会建碑云々

〇〇〇〇

横浜建築業有志者

横溝豊刻字

すなわち、明治十九年コレラなどの伝染病で死亡した無縁者の残骨三〇〇余りを見るに忍びず、有志の者がここに埋葬、明治二十六年の春彼岸の大法要を大光院で行い、碑を建てたというのである。私は早速南区伏見町の大光院を訪ねて住職に会い、このことを聞いて見た。しかし百年前のことで寺側には何の記録もなかった。

第二の墓は五区官修墓地のすぐ裏手にある。川又事、三輪承真、横塚善之助、桜井虎吉、石田小遁口太郎ら一〇墓が別々に建っている。大部分が明治十九年七月虎列刺殉職の巡査の墓で、横浜警察署や同僚有志の協力でこれを建てたと記されている。

最後の墓は動物慰霊碑のそのすぐ上の一七区にある。一メートルほどの高さの四角い墓石の正面には「伝染病死者の墓」と書かれ、左面には「自明治廿年至同三十年、三百九十一名合葬」と記されていた。この期間は横浜でも、コレラ、赤痢、天然痘、腸チフスが流行していた。コレラが多かったのは明治二十三年と二十八年である。傍らに日蓮宗妙光結社と墨痕鮮やかな新しい卒塔婆が建っていた。妙光結社をいろいろ当たって分かった事だが、これは神奈川区中丸在住の瀬野上人という人が現在でも春秋の毎年二回自発的に供養することである。奇特な人だ。

現在横浜市衛生局では着々と墓地の整備をしている。しかし整備には多額の費用がかかるので、無縁墓地は処分される公算が強い。西区の久保山墓地に限らず、中区の相沢墓地にも二〇〇余名の伝染病死者の無縁墓地があると聞く。市全域、全県下のこれらの墓地を整備し、正確な記録を残しておく必要を痛感する。

コレラ菌の発見

この問題は本稿とは直接関係はないが、コッホによるコレラ菌の発見の日時を調べてみると、明治十六年と書いたもの

もあれば、十七年と書いた文献もあるが、日付けは記されていない。『毎日新聞』明治十九年八月四日の記事に「昨年独逸の名医コッホ氏がコレラはコンマバチルスが腸中にありて害をなすものとのことを発明せり」と記されている。十八年は明らかに間違いだが、コンマ菌が当時すでに知られていたことが理解される。

川喜田(二七)によれば、

……近代細菌学の登場の前には、ミアスマ(瘴氣)説とコンタギオン(接触伝染)説という、それぞれ「頑迷な」保守派と「科学的な」進歩派との学説が執拗に対立していたが、やがてパストゥール、コッホをもって代表される優れた研究者たちによる輝かしい病原体発見が次々と続いた結果……

こんな時代であったからこそ、コッホの発表も慎重そのものであった。  
(二七)  
村山に従って筆を進める。

一八八三(明治十六)年から八四年にかけてコッホがコレラ菌を発見したのは周知の事実である。一八八三年六月頃、エジプトでコレラの流行が始まった。フランス政府は五万フランの予算でパストゥールの門人ルーとチュールリエら一行を派遣、ドイツは少し遅れて八月九日コッホ、ガフキーらの一行を目的地エジプトのアレキサンドリアへ派遣した。両国ともコレラの原因を究明するためであったのは言うまでもない。九月中旬、フランス班のチュールリエが不幸コレラに罹り最初の犠牲者となった。ルーとコッホは心からの哀悼を捧げた。フランス班は目的を達せず十月中旬故国へ引き上げた。

コッホ一行の研究はエジプトではその原因究明にもう一步というところまで進んだが、最後の結論には達しなかった。しかもエジプトではコレラ流行が鎮静化したため、彼らはコレラ流行のメッカであるインドへ移った。一行がカルカタへ到着したのは十二月十一日であった。翌々日の十三日から研究を開始、数日後にはコレラ菌を発見、純培養にも成功したらしい。翌一八八四年一月七日コッホがカルカタからドイツ政府へ送った第五回報告書があるが、ここで初めてコンマ菌がコレラの原因であることを表明している。一八八四年七月二十六日ベルリンで第一回コレラ会議のさい、コッホは

コレラの病原菌発見についての詳細な報告を行った。ここにおいてコンマ菌がコレラの原因であることが承認された。ベッテンコフエールが後にコレラ菌を服用、別状なかったことは有名なエピソードである。

(二八) (二九) 竹田、藤野によれば、これより三十年前の一八五四年イタリーのバシニーはコレラ患者からコンマ菌を発見、コレラの原因としたが、コッホはこの論文を読んでいかなかったらしい。

症状が重く死亡率の高い古典的コレラはアジアコレラと呼ばれたが、大正末期になってエルトル型と呼ばれるコレラが流行するようになった。現在インド、東南アジア、時には日本へも散発的に侵入するコレラはエルトル型である。後者は症状も軽く死亡率も低い。

### その後の横浜伝染病院とハイデン

明治十年 太田避病院できる

明治十二年 和泉町避病院に移る

明治十四年 神奈川県から横浜区(市)へ無償払下げ

明治二十二年 横浜に市制がしかれる

明治二十四年 横浜市避病院規則(当病院は十全付属)

明治三十年 横浜市避病院は横浜市伝染病院と改称

明治三十三年 横浜市万治病院と改称 ハイデンを招聘(監督として八月十六日)

明治三十八年 ハイデン万治病院を辞任(一月七日)

大正十一年 万治病院南吉田町から滝頭に移転

大正十二年 九月一日関東大震災で被害を受けたが負傷者なし

昭和六十三年 万治病院の百十年『横浜疫病史』刊行

万治病院の歴史は『横浜疫病史』に詳しい。

ハイデン（ヘーデン）については最近まで詳細な履歴が分からず、明治二十七年フランスへ帰り帰国後故郷で没したと記され、それが定説となっていた。しかし横浜市衛生局森本豊子がワンダーハイデンとファン・デル・ヘーデンが同一人物ではないかという疑問を持ち、『横浜貿易新聞』<sup>(三〇)</sup>を読んだことや、蒲原、<sup>(三一)</sup>石田らの研究によって、かなり全貌が判明してきた。「本誌衛生事務ノ顧問並ニ市立万治病院ニ監督ヲ嘱託スルタメ和蘭国人ドクトルハイデン氏ヲ招聘シ向フ満五ヶ年ニ契約ヲ以テ手当トシテ年額金二千円ヲ支給スル件市会ノ決議ヲ経タリ 明治三十三年八月十六日 横浜市長 梅田 義信」

ハイデンが万治病院の嘱託を自分から辞任したことは「横浜市報」第八八号、明治三十八年一月十日付けに見られる。蒲原、石田によれば、ヘーデンは明治七年、月給三〇〇円で二年間新潟病院に雇われ、解剖、生理等を担当した。新潟では恙虫の研究などをしている。明治十年神戸病院に勤務。十三年イギリス人喀血患者を解剖。十五年一時帰国し、十六年再来日。十七年東大医学部で内科、産婦人科を担当。この頃中央衛生委員、日本薬局方委員を拝命。明治十九年には横浜居留地七三番にあり、全国的なコレラ流行に際し、「Our Knowledge of Cholera, General Hospital Yokohama 一八八六」を出版している。横浜一般病院勤務はメクル院長時代である。明治二十七年リューマチのため一時帰国。三度来日して万治病院に勤めた。

### コレラ一揆（騒動または騒擾）

明治期コレラが流行するたびに、住民は非常な不安に襲われ、政府はその対策に腐心、医師は特別な治療法も無いまま、予防と治療に懸命の努力をした。上水道や下水道が整備され始められたのは明治二十年以降のことであり、人糞が畑

の作物の肥料として珍重された時代であれば、如何に衛生思想が低かったかが理解される。したがって、患者は巡査に強制されて避病院に送られてもその大部分は死の転機をとり、火葬場が大混雑するのが常識であった。医師は水源、井戸、便所などに消毒薬を撒布、あとは巡査に協力するくらいしか手段が無かった。

こんな状態であったから、住民の政府不信、医師不信はその極限に達し、明治十、十二、十五、十九年にはコレラ一揆が日本のあちこちで発生した。数十人ないし数百人の大衆が集まり、詰所の巡査に暴行を加えたり、コレラ患者を避病院へ送る警官に反対したり、金持ちの家に乗り込んで炊き出しを要求したり、竹槍やこん棒、斧などで医師や吏員を威嚇するなど、権威に対する不信と反感の現れであった。大衆の愚昧さのため、医師が井戸に毒物を撒いたり、避病院では患者の生肝が採られ転売されるなどの荒唐無稽な噂が信じられた。

明治十二年新潟で発生した暴動の原因は、立川(三三)によれば、

一、米価の高騰

二、コレラ予防のための魚類販売停止

三、コレラ患者を避病院へ送ること

に反対することで、流行を機会に不満が爆発したものといえる。

明治十年千葉県鴨川で起きた沼野文昌殺害事件はもつと悲惨なものであった。(三四)

神奈川のコレラ騒動事件は『毎日新聞』に見られる。(三五)

「神奈川駅の人民凡そ四五十名程同所警察署雇医師某はコレラ病を増殖させ怖るべき医師なりとて根も葉もなきことを言い触らし某の住宅に至り門戸を破り火石を投じ某を打殺すべしと騒ぎ立てしを巡査が聞込み駆けつけてようやく取鎮め暴行者中重なるもの九名を拘引せしは去月廿五日のことにて目下取調中なりといふ」

(三六)宗田によれば、内務省衛生局顧問で横浜司薬場監督オランダ人ヘールツはコレラ対策にもつとも緊要なことは、「官民



の協力」にあり、粗暴な官憲の威力を用いるのではなく、人民に良く条理を理解させ、人民の協力を得ることが最も必要だと内務卿に提出した意見書で述べている。

現在では想像もできないコレラ流行に、過去の人々は振り回されていた。しかし、コレラを始め種々の伝染病の教訓が生かされ、現在の生活環境が生まれたのである。

## 文 献

- (一) 宗田 一『臨床科学』二五卷一二号、一九八九、一六七七頁、コレラ。
- (二) 『藤沢医史』一九八四、三九頁、藤沢市医師会。
- (三) 『郷土よこはま』四卷六号、四三頁、「金川日記」一九六〇、横浜市図書館郷土史料室。
- (四) 酒井シヅ『日本の医療史』一九八二、三八五頁、図書印刷株式会社。
- (五) 山本俊一『日本コレラ史』一九八二、一九頁、東京大学出版会。
- (六) 『武江年表』二卷、一九七〇、平凡社、東洋文庫。
- (七) Stuart Eldridge M. D. Notes on the Diseases Affecting European Residents in Japan, Shanghai, 一八七八。
- (八) 『医制百年史』資料編、一九七六、五四五頁、厚生省医務局。
- (九) 『日本医史学雑誌』一五卷二号、一九六九、六四頁、杉田暉道「公衆衛生より見た横浜医学史」。
- (一〇) 『日本コレラ史』二八頁。
- (一一) 『横浜毎日新聞』二〇四四号、一八七七・九・一九。
- (一二) 同右、二〇四三号、一八七七・九・一八。
- (一三) 『医制百年史』資料編、二二九九頁、『日本コレラ史』八六五頁。
- (一四) 『日本医史学雑誌』三三卷二号、一九八七、一二一頁、荒井保男「米医D・B・シモンズ」。
- (一五) 『横浜疫病史』万治病院の百年、一九八八、横浜市衛生局。

- (一六) 『検疫制度一〇〇周年記念史』一九七九、五九頁、日本検疫衛生協会。
- (一七) 『日本コレラ史』四七、四八頁。
- (一八) 中野 操『錦絵医学民族志』一九八〇、六九頁、金原出版株式会社。
- (一九) 『日本コレラ史』六四頁。
- (二〇) 大滝紀雄、かながわの『医療史探訪』一九八三、一〇一〜一四二頁、秋山書房。
- (二一) 『関口日記』二〇巻、一九八二、三七三、三八八、三九二、四〇〇頁、横浜史文化財研究調査会。
- (二二) 『関口日記』二一巻、一九八三、三二五、三二六、三二七、三三三頁。
- (二三) 『医療史探訪』七〇頁。
- (二四) 『神奈川県医師会報』一九八七・十月号、八〇頁、大滝「神奈川医学史散歩」。
- (二五) 『日本医師会ニュース』一九九一・三・五、大滝「医界風土記」四三三。
- (二六) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』下、一九七七、一〇二頁、岩波書店。
- (二七) 村山達三『日本医事新報』一九〇九〜一九一一、「コレラ談義」、一九六〇。
- (二八) 竹田美文、Medical Tribune、一九八六・五・八。
- (二九) 藤野恒三郎、Medical Tribune、一九八八・十二・八。
- (三〇) 『横浜貿易新聞』明治三十三年八月二十二日。
- (三一) 蒲原 宏『医学近代化と来日外国人』一九八八、三六頁、世界保健通信社。
- (三二) 石田純郎『江戸のオランダ医』二二二頁、三省堂選書。
- (三三) 立川昭二『明治医事往来』一九八六、六八頁、新潮社。
- (三四) 立川昭二『明治医事往来』六〇頁ほか。
- (三五) 『毎日新聞』一八八六・八・一および一八八六・八・四。
- (三六) 宗田 一『日本医療文化史』一九八九、四一六頁、思文閣出版。

(横浜市西区)

# Cholera Epidemics in Kanagawa

by Toshio OTAKI

In 1822 cholera first arrived in Japan, but it did not reach Edo, which is the old name of Tokyo, nor Kanagawa, a prefecture located next to Tokyo. During a second epidemic in 1858, 30,000 or so Japanese died and Kanagawa had a heavy toll. Cholera raged in Japan in 1877, 1879, 1882, 1886, 1890, 1891 and 1895. In 1877, an American doctor named D.B. Simmons was working at Jūzen Hospital (the previous hospital of Yokohama Medical College) in the Noge area in Yokohama, Kanagawa. He and his team tried to cure cholera patients by disinfecting the patients and their wastes with carbolic acid or phenol. They knew that isolating the patients was a good way to prevent the epidemic.

As there was no hospital for infectious diseases in Kanagawa, they hurriedly built a small temporary hospital near Jūzen Hospital and named it Ōta Isolation Hospital, where cholera patients were sent and treated.

In 1879 as people suffered again from an epidemic, Ōta Hospital was replaced by Izumicho Isolation Hospital, which became a hospital for infectious diseases two decades later in 1900 and was called Yokohama Manji Hospital. Manji means to cure all. Wilhermus Hubertus van der Heyden, a Dutch doctor, worked for this hospital.

The first regulation of cholera prevention in Japan was issued by the Bureau of Health of the Ministry of Internal Affairs in 1879.

( 83 )

Quarantine was started in the same year. The first station known as Nagaura Disinfection Station was established in Yokosuka, Kanagawa. From July 1879 all the boats coming from cholera-infected areas and entering Tokyo Bay, had to go through the inspection. If there was any sign of the disease, an order was given for the boat to be checked and disinfected at Nagaura Station. In 1895 the station moved to Nagahama, a southern town of Yokohama.

About four hundred people who had died in the epidemic during 1886 and 1897 were buried in Kuboyama Cemetery in Yokohama.

There was a lot of misunderstanding in those days because people in general still didn't know the cause or an effective cure for the disease; the cholera bacteria (*Vibrio cholerae*) was discovered by Robert Koch in 1883. Hygienic conditions were also very poor at that time.

Nowadays the old Asiatic cholera is extinct. We find a slight incidence of cases of infection once in a while among those who come back from Southeast Asia.